

## 第2部「若者未来サミット in 青森～スウェーデンと日本の若者と考える未来～」

(出席者)

司会	堺 啓輔 会員 (福井弁護士会)	
	久野 由詠 会員 (愛知県弁護士会)	
参加団体		
	浜松若者社中	A、B、C
	YEC (若者エンパワメント委員会)	D、E
	NPO法人文化学習協同ネットワーク 若者会リスタ	F、G、H、I
	青森県立保健大学 (有志の学生)	J、K、L
	スウェーデンの若者 (ウプサラ市・若者の家)	ダヴィド、ベンヤミン

(目次)

1. 導入・登壇者の自己紹介
2. 学費や生活費の負担について
3. “ルール” から外れることへの恐怖
4. 失敗＝自己責任、自分の能力不足…
5. 「何者でもない状態」への不安
6. スウェーデンの若者が大事にしていること
7. 受験戦争と友人関係、競争社会
8. いろいろな“成功”の形がある
9. 「自己責任」の解釈と試行錯誤する権利
10. 受け取ったから、税金で貢献は当たり前の社会
11. 社会への信頼感が育まれる理由
12. 日本における支え合い、若者の社会参加の萌芽
13. 若いというだけで価値がある
14. 「生きた社会」になるために望むこと
15. スウェーデンの若者からのエール

## 1. 導入・登壇者の自己紹介

(久野) 定刻となりましたので、第2部を始めます。

第2部では、「若者未来サミット in 青森～スウェーデンと日本の若者と考える未来～」と題しまして、日本の若者とスウェーデンの若者とで意見交換をしていただきます。

進行は、福井弁護士会の堺啓輔と、愛知県弁護士会の久野由詠です。よろしくお願いいたします。

(堺) 最初に、日本全国、そして、海外から、このサミットのために集まってくださいました当事者、団体の方々から、それぞれ、自己紹介をしていただきます。

では、順番に、お願いできますか。

(久野) 初めに、浜松若者社中の皆さん、よろしくお願いいたします。

A 皆さん、こんにちは。

会場 こんにちは。

A 浜松若者社中代表のAと申します。

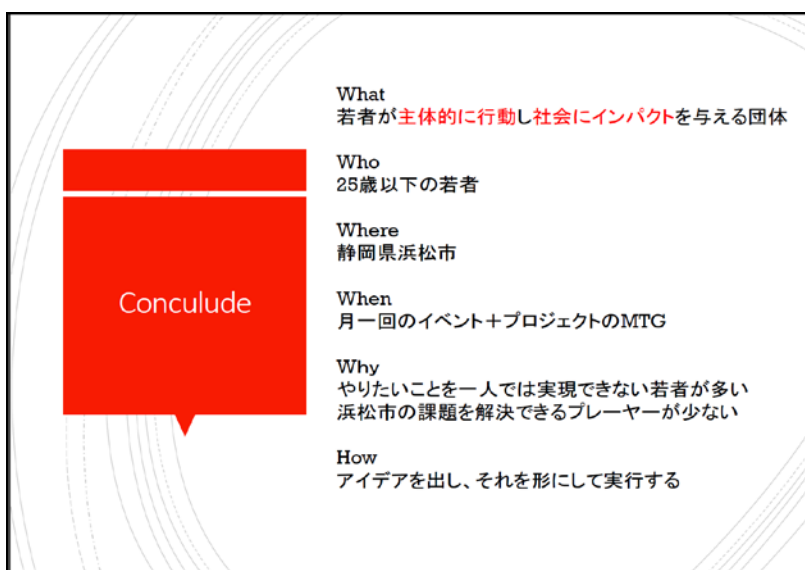
B 同じく、浜松若者社中のBです。

C 同じく、Cです。

A 本日、トップバッターということでものすごく緊張しているし、いきなり出てきたのに「浜松若者社中」という大変堅い名前で、「若者らしくないではないか」と思う方もいるかもしれませんが、話し方だけでも少し若者らしくやっていきたいと思うので、よろしくお願いいたします。

それでは、5W1Hを使って、浜松若者社中についてできるだけ分かりやすく紹介したいと思います(資料1)。

### 【資料1】浜松若者社中の作成資料より



まず、「若者社中とは、どのような団体か」ということです。主に二つ目的があつて、若者が主体的に行動できるようになるということが一つ目の目的、そのような若者がどんどん社会にインパクトを与えていこうということが二つ目の目的です。

活動しているのは、25歳以下の若者で、下は中学生から、上は25歳の社会人までで構成され、縦のつながりを持っている団体です。活動場所は静岡県浜松市で、ウナギやギョーザがおいしい町なので、ぜひ、皆さん、1度行ってみてください。

いつ活動しているかということなのですが、基本的に、1月1回のイベントを開いています。その他に、それぞれ、自分たちがやっているプロジェクトの集まりなど、自主的に集まっての活動もあります。

なぜ、このような活動をしているかという点、「若者はいろいろやりたいことがあつても、なかなか、それを1人では実現できないよね」という悩みがあつたり、他方で、「浜松市にもいろいろな社会課題があるけれども、なかなか、それを解決できるプレーヤーがいないということで困っている」という声があつたりで、そのような人たちの悩みを解決するために、私たちは活動しています。

では、具体的な活動内容の方を、Cからご説明します。

C では、具体的な活動内容をご説明します。

まず、月に1回、「若者会議」という会議を開催し、一つのテーマを決めて、企画をしていきます。

企画から実行に移したものの一つとして、「浜松アトランチ」があります。若者が街中に集まるにはどうしたらよいかを考えて、お店に協力を求めて、ランチをお得に食べられるような冊子を私たちが制作して、販売しました。他には、観光地に子どもが集まってくるように、遊びを考えるプロジェクトを実際に行いました。

B 以上が若者社中の説明になるのですが、私たちは、若者の熱意を基に活動している団体になります。いろいろと若者の成長に向けて頑張っていこうと思いますので、今日はどうぞよろしく願いいたします。

(久野) 続いて、若者エンパワメント委員会の皆さん、お願いします。

D 若者エンパワメント委員会（YEC）所属の、大学2年生のDです。

E 同じく、若者エンパワメント委員会所属の、大学2年生のEです。

D では、簡単に、私たちの活動の説明をさせていただきたいと思います。

私たちは、静岡県立大学の大学生が中心となっている、2009年に発足した学生団体です。YECの始まりは、私たちの顧問である津富宏教授が団体の設立者で、現在は北欧の若者政策の研究者となっている両角達平さんに「ユースセンター」という場所を紹介したことから始まっています。「ユースセンター」は、北欧に大変多くあつて、日本にも少しあるのですが、ユース世代、若者世代の余暇活動の場所であつて、とても若者の主体性が大事にされている、秘密基地のような場所のことです。「そのようなユースセンターを静岡にもつ

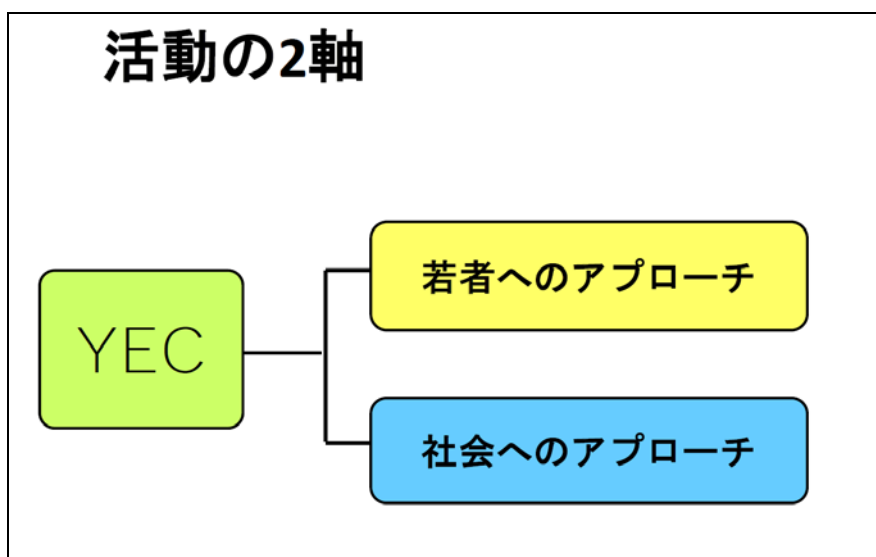
くろう」と始まったのが私たちの団体なのですが、学生だけで、活動する建物を持って運営することはとても困難なので、そのユースセンターの中身、内容だけは提供しようとして、私たち、若者エンパワメント委員会は設立されました。

私たちのミッションは、「すべての若者が思いを形にすることを通じて、社会のつくり手になるために」というミッションの下、活動しております。

問題意識として、「最近の若者は……」「まだ若いから知らないでいい」とされるのは、若者に対する差別や偏見だと思っています。そのような状態では、本来若者が持つ力などが発揮できないと思います。そこで私たちが行うことは、「エンパワメント」です。エンパワメントとは、本来ある力を発揮できるような状態にすることで、私たちにとっては、若者が、差別や偏見があっても力を発揮できるようにすること、若者に対する差別や偏見を減らすことが、私たちにとってのエンパワメントです。

今、活動は、大体この二つの軸に分かれております（資料2）。

#### 【資料2】 若者エンパワメント委員会作成資料より



若者へのアプローチとしましては、中高生のやりたいことを企画・実行する活動しております。「自分でも、こんなことができるんだ」「自分でも社会をちょっと良くできる」と感じて、その先に進んでいってもらいたいと思って、活動しています。参加してくれた中高生からは、「自信がついた」など、いろいろな意見・感想をもらっています。

また、社会へのアプローチとして、講演会も行っています。私たちは、今年6月にスウェーデンに実際に行き、ユースセンターなどを視察し、本場のユースワークを学ぶことができました。

今まで長らく説明しましたが、簡単に言うと、私たちは、若者の力を信じて応援し、その若者の力を世の中に伝えるような活動をしています。

よろしくお願ひします。

(久野) 続きまして、NPO法人文化学習協同ネットワーク若者会リストの皆さん、お願いします。

F NPO法人文化学習協同ネットワーク若者会リストのFです。

G 同じく、Gです。

H 同じく、Hです。

I Iと申します。

F 私たちNPO法人文化学習協同ネットワーク、少し名前が長いので、「協同ネット」と略させていただきます。協同ネットは、子どもの学習支援と若者の自立支援を行っている団体です。

社会に出る前、社会に出た後、生きづらさを抱えた若者たちが、若者サポートステーションでの面談をしつつ、居場所での各プログラムや、「風のすみか」というパン屋さんで実際に働きながら行う研修を経て、自分自身の働き方、他者との関わり方などから、人としての尊厳を取り戻し社会につながっていきました（資料3）。

#### 【資料3】 NPO法人文化学習協同ネットワーク作成資料より



そのような若者たちが、仕事をしながら月2回集まって、自分たちのこれまでと、今と、これからについて、学び直し、捉え直し、一緒に考えていこうとしている会が、若者会リストです。

若者会リストでは、本田由紀さんの著書である『社会を結びなおす』を題材に話し合いを行ってきました。そこで出た話、また、僕自身が当事者として体験した話、今現在、支援者として実感している話、そのようなものを、今を生きる若者の一視点として、今回お話しできたらなと思います。

よろしくお願いします。

(久野) 続きまして、青森県立保健大学の皆さん、よろしくお願いします。

J 皆さん、こんにちは。

(会場) こんにちは。

J 青森県立保健大学のJと申します。

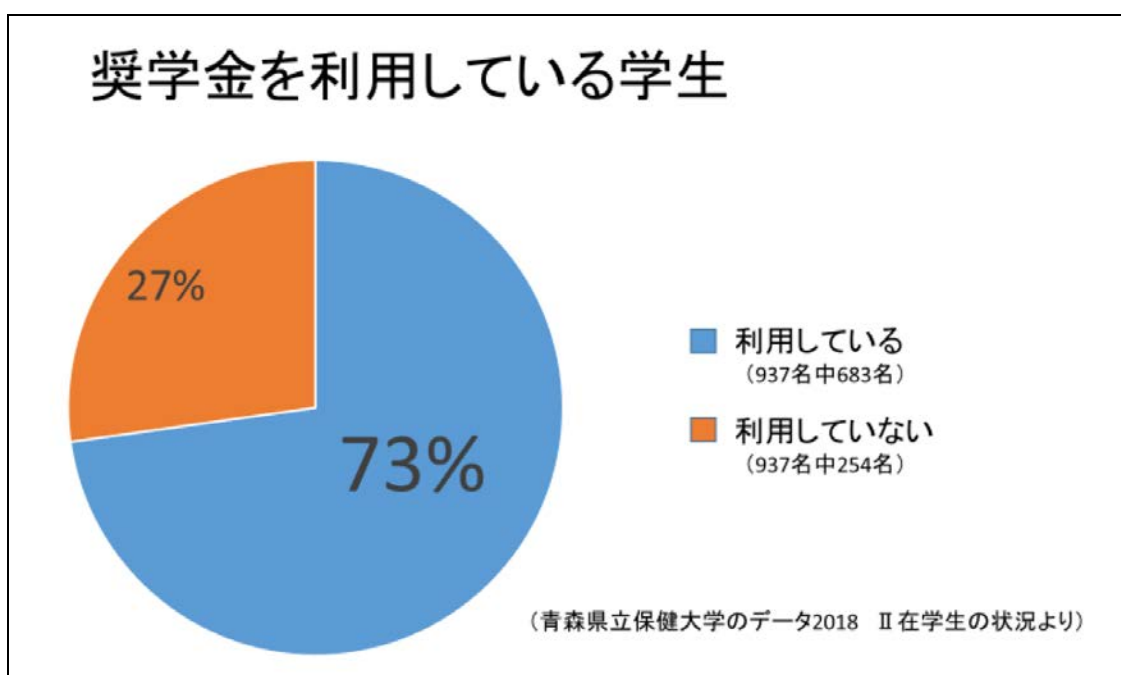
K Kと申します。

L Lと申します。よろしくお願いいたします。

J 私たちからは、青森県の学生をイメージしていただくために、私たちが通う青森県立保健大学の奨学金利用率と平日のスケジュールについて、紹介させていただきます。

初めに、奨学金についてです。皆さん、スクリーンをご覧ください。

#### 【資料4】 青森県立保健大学の有志学生ら作成資料より



こちらは、青森県立保健大学の1年生から4年生、全学年の奨学金利用率データとなっております。全学年937人中683人、約73%もの学生が、奨学金を利用しております。青森県の学生は、奨学金を利用することに抵抗感はなく、「ごく普通で、当たり前のことである」という認識を持っています。

K 次に、学生生活の一例として、昨年の私の1週間のスケジュールを、ご紹介いたします。

基本的に講義を毎日受けており、その他の時間は、約5時間から6時間ほどのアルバイトを、週に3日から4日ほど行っていました。

また、学生間の交流として、野球やバスケットボールなどのサークル活動に加え、やはり、汗を流した後の飲み会といったことを、学生らしく活発に行っていました。

先ほどの奨学金取得率の高さにあったように、私も奨学金を借りていまして、返済や生活のことを考え、アルバイトは必須となっていました。私は、一つのアルバイトだけを行っていましたが、複数のアルバイトを掛け持ちしたり、10時間以上のアルバイトを週に何日も行ったりする人も多くいました。このことは決して特殊ではなく、私たちの中では当然のこととして認識されているのが現状となっています。

以上で、私たち青森県立保健大学の自己紹介を終わります。本日は、よろしくお願いたします。

(久野) そして、スウェーデンで「若者の家」の運営に携わっているお2人からも、自己紹介をお願いします。

(ダヴィド) (日本語で) こんにちは。

(会場) こんにちは。

(ダヴィド) ダヴィドといいます。友達がベンヤミンといいます。スウェーデンから来ています。ウプサラという町の「若者の家」というところで活動しています。

(ベンヤミン) ウプサラという町は、スウェーデンの首都ストックホルムから北の方面に約1時間行ったところにあります。多分、青森市と比較すれば、まあ、少し小さいかもしれないけれども、それほど変わらないようなところです。

(ダヴィド) 名前はダヴィドで、17歳です。今は高校生で、そこで、人文学の方針のプログラムを選んで、その中で文化に特化しています。サッカーもしていますが、スウェーデンの特徴として、市から補助金が出て、そのサッカーのチームが運営されています。

(ベンヤミン) 私はベンヤミンで、19歳です。今年の6月に高校を卒業したばかりです。さらに進学するまでの1年間、ある会社の倉庫で働くことを選んでいました。仕事をしていないときは、「若者の家」で、理事会の理事の1人として活動しています。ダヴィドと一緒に、コンサートなど、若者向けのイベントを開催したりしています。

(ダヴィド) 私の通学している高校の写真で、ベンヤミンも行っていました。スウェーデンでは、学校の予算は国や市から出るので、学校に行くのにお金は要りません。教材も無料でもらえますし、給食費もかかりません。



【資料5】 ダヴィド作成資料より



次の写真は、紹介した「若者の家」です。この運営理事会で、私たち2人とも理事をしています。「若者の家」は、若者が文化的にも知的にも発展していくための場所です。ウプサラ市から活動資金をもらっていますが、運営は、全て若者たちだけで行っていて、活動内容も完全に若者のための活動です。

【資料5】 ダヴィド作成資料より





(塚) 今、それぞれの団体から、自己紹介をしていただきました。このように、日本全国から集まっていたのは、浜松の浜松市若者社中の皆さんは、若者の社会参加を目指して、若者自身で自分たちの自主的な活動をしている団体であるということ、静岡エンパワメント委員会の方は、同じような活動もしていますし、さらには、スウェーデンに実際に視察に行った経験があるということで、その観点からも、お話を伺いたいと思います。東京のリスタの方々は、就職していたり、若者サポートステーションを利用して再チャレンジした経験を持った方々、そのような方からのお話を伺いたい。そして、青森県立保健大学の皆さんからは、地元青森の学生さんの生活感覚のようなものを、ぜひ話していただきたい、そのように考えて、日本の若者の皆さんにお集まりいただきました。

そして、スウェーデンのお二人は、先ほどの海外調査報告でも少し紹介がありましたが、私たちが、このシンポジウムの準備としてスウェーデン調査に行ったときに会った方々です。ただ、スウェーデンで出会ったからといって、誰でも日本にまで来てくれるわけではないので、なぜ、彼らは、ここ青森でのシンポジウムに来てくれたのか、少し話を聞いてみたいと思います。

なぜ、日本に来てくれたのですか。

(ベンヤミン) スウェーデン視察に来られた弁護士の皆さんとのミーティングが終わってから、私とダヴィドは、とてもポジティブな気持ちになっていました。

私たちは、ミーティングでたくさん学んだし、弁護士の皆さんの視察の目的を知って、若者の可能性や権利などに関係した私たちの活動と、弁護士の皆さんの活動が似ていると思いました。

だから、その弁護士の皆さんを応援したいと考えて、何かできないか、あるいは、何かの形で協力できないかと考えました。

(塚) スウェーデン視察からの帰国後に、このようなありがたいお申し出をメールでいただいて、せっかくスウェーデンから彼らが来てくれるのであれば、「日本各地からも、いろいろな若者たちが集まって、一緒に話をしてみたら面白いだろう」と考えたところから始まったのがこの第2部の企画です。

では、早速ですけれども、この若者たちと一緒にディスカッションをしていきたいと思っています。

## 2. 学費や生活費の負担について

(久野) まずは、日本の皆さんに、いろいろ聞いていきたいのですが、先ほどの自己紹介の中で、1週間のスケジュールに占めるバイトの割合が、「毎日の講義もありながら、1日に5、6時間を週に3日ほどやっている。」とのことでした。そこで、青森のLさん、アルバイトについて、より具体的な内容を教えてもらえませんか。

L 私は、アルバイト漬けで体調を崩した経験があります。その経験について、少しお

話します。

元々は、不足している生活費を補うためにアルバイトを始めました。時給が高いということに惹かれて、大手居酒屋チェーン店で働くことにしました。そこが、まあ、いわゆる「ブラック・アルバイト」と言われてしまうような場所でした。

具体的には、最初のうちは、「早く帰っていいよ」と言われていたけれど、徐々に地位が上がって、立場が上になると、ぶっ通しになりました。金曜、土曜日は、夕方5時から深夜3時まで働くこともありました。一番ひどかったのが繁忙期で、繁忙期は、夕方4時から翌朝の7時まで働くということもありました。その1日だけではなくて、10日連続で勤務するということもありました。

さすがにヤバイと思って、生活もどんどんおかしくなっていって、授業にぎりぎりに行くことになったり、授業中、居眠りをしてしまうことも増えて、周りの人からも「最近おかしいね」と言われることが増えました。精神的にも肉体的にも限界が来て、周りの人に相談などもしました。そうしたら、「辞めたほうがいい」と言ってくれる人が多かったので、辞めることを決意しました。

でも、そこからがまた大変で、店長が自分よりも劣悪な環境で仕事をしていたので、自分が辞めたら店長が死んでしまうのではないかと思って、怖くなって、辞められずにいました。でも、その思いよりも自分の将来を考えて、心を鬼にして辞めることを決意して、「辞めます」と言い、言ってからも3か月以上働いたのですけれども、最終的に辞めることができました。

このような経験をしているのは私だけではなくて、周りの人も、そのような経験をたくさんしています。きついバイトをすれば、十分な生活ができる収入を得られるけれども、その分、生活が崩れていく。ただ、楽なバイトをすると、生活が成り立たない、カツカツの生活になってしまうという現状が、青森だけに限らず、あると思います。

(久野) とても壮絶なアルバイトの経験談ですね…。

今、「生活のためにアルバイトをしないと立ち行かない」という話がありましたが、学費や、それを補うものとして奨学金を借りているかどうか、についてはいかがですか。

K 自分は、大学進学にあたり、月に8万円借りられることになりました。ただ、その8万円をすべて使い切るというわけではなくて、5万円を家賃と光熱費、残りの3万円は、何かあったときのための貯蓄として、貯めてきました。その他の生活費を何とか補うために、アルバイトもやっていました。

J 僕も奨学金を借りるには借りてはいるのですけれども、それは一銭も使わずに、全額貯金しています。

(久野) なぜ、使わずに貯金するのですか。

J それはなぜかと言いますと、大学在学中に何か不測の事態が生じて、大学に通うことができなくなるというリスクを避けるためです。

また、最も怖いのは、卒業後に奨学金を返せなくなるということなので、卒業までに何もなかったら、一括して返済する予定です。

(久野) どれも衝撃的なエピソードですが、今の青森の皆さんからのお話で、大学生にとって学費や生活費の負担が相当重いということがわかりました。金銭的負担について、静岡のDさんは、どうですか。

D 僕は、とても個人的な話なのですが、非常に親が教育熱心で、中学受験をして、神奈川県の中高一貫の男子校に進学したのです。ただ、中学校の途中から、3か月か4か月おきに学校から封筒が届いて、「あと1か月学費を滞納すると退学になるよ」という通知が来るようになりました。それで、そのような家計状況の中で、無理して私学に通わせてもらっているということを知りました。でも、僕はそこまで勉強ができるわけではなく、むしろ落ちこぼれで、成績が学年で下から10番目くらいだったこともありました。親が、僕にとっても期待して、僕のことを思って、無理して高いお金を払って、いい学校に通わせてくれていたのに、自分は何もできなくて、親に無理を強いて負担ばかりかける自分は何をやっているんだろうという感じで、ずっと大学受験まで過ごしていました。

(塚) 学費の負担が、とても切実な問題のように思うのですが、スウェーデンの方に少し聞いてみたいと思うのです。学費の問題で苦しいということは、スウェーデンでは、あるのでしょうか。

(ダヴィド) スウェーデンでは、小学校、中学校、高校、また大学も、学費が全くなくて、無料です。さらに、生活に使えるお金として少しの補助金をもらえます。学生の経済面が悪化しないための制度があります。

(ベンヤミン) スウェーデンでは、「社会が私たちに教育を提供することで、私たちに投資する。それで、私たちが働くようになったら、それを社会に還元する形で、働いて税金を払う人になる」というように考えられています。

### 3. “ルール” から外れることへの恐怖

(久野) 教育に対する考え方が日本とは大きく異なりますね。

少し話が変わって、「仕事をする」ということについて、今、大学4年生で就活を終えたばかりと聞いている浜松のAさん、就活を通じて感じたことや考えたことなどがあれば、教えてください。

A はい。僕自身、就活自体は、とても自分が行きたい企業に行くことができ、成功したと考えているのですが、それまでの過程で、まあ、正直、自分で言うのも何ですが、めっちゃくちゃ努力したと思います。本当に就活の本などを30冊以上読んだり、いろいろなネットワークやインターネットを使って、何か作ったり、いろいろなことを学んだり、もう、いろいろなことをやったからこそ、まあ、成功したとあっていて。逆に、

本当に、何も努力しないと、もう、どんどん沼に引きずり込まれていって、自分が行きたい企業に行けなかったり、結局、安定を選んでしまって、やりたいことからどんどん遠ざかっていくというようなことが、あると思います。

やはり、日本は、新卒の一括採用で、1回しかチャンスがなくて、それで失敗してしまったらもう次がないと思ってしまうからこそ、「ああ、自分は、やりたいことあるんだな」ということが分かっているけど、結局、安定志向になってしまって。友達なども、結局やりたいことができずに、もう本当に、「とりあえず安定を目指して」「本当はやりたくないけど、仕方ないから」と言って、会社を選んだ人が多くて、そこに、やはりプレッシャーがあると思います。

(久野) 1回しかチャンスがないから必死に努力するというプレッシャーだったり、本当にやりたいことよりも安定志向で会社を選ぶ、と。

では、既に社会人として1度社会に出ている立場の東京のFさんにもお話を伺いたいです。ご自身が生きづらさを感じたエピソードも含めてお聴かせください。

F はい。

「引きこもりニート」と言うと、皆さんは、どのような人を想像しますか。学生時代のいじめだったり、不登校だったりというものをイメージされるかと思いますが、僕自身、実は引きこもりでした。

ですが、僕自身は、いじめや不登校のような体験はしておらず、大学を卒業するまで大きな挫折を味わうようなことはありませんでした。ただ、社会に出るちょうどそのとき、リーマンショックがあって、大変な就職難の中、就職活動をするようになったのですが、たまたま自分の研究内容をそのまま生かせる仕事に就くことに決まって、とてもやる気と希望に満ちて、社会に乗り出していったのです。

そこで、まあ、「石の上にも三年」の精神ではないですけども、「責任を持って頑張ろう」という思いで仕事をしていたのですが、その職場でパワハラを受けて、心と体を病んでしまって、もう耐えられなくなって、その仕事を辞めることになりました。

ただ、パワハラというものは単なるきっかけに過ぎなかったのではないかなと、今になって思っています。といいますのも、自分がそのとき何が一番怖かったかと言うと、普通の社会人というルールから外れることということに、とても自分は恐怖を感じていたのではないかなと、今になって思うのです。実際そのルールから外れたときの絶望感というものは今も大変よく覚えていて、心が折れたときに、もう社会から転げ落ちるような感覚が非常にして、もう、「どこに進めばいいんだろう」「何をしたらいいんだろう」という不安感や絶望感、また、再び自分が社会の中に飛び込んで生きていくということへの恐怖感というものに、とても囚われていて、もう、そのときには、自分は引きこもることでは自分を守ることができなくなっていました。

(久野) つらい経験をお話しいただいて、ありがとうございます。

今の「レールから外れることに対する恐怖感」ということについて、他の皆さんは実感はありますか？

K はい。自分も、現在、就活が終わりまして、今に至るまでレールに従って生きてきたな、という実感はあります。

それは、まず、高校は、地元の進学校に進学したのですけれども、その進学校を選んだ理由というのものも、大学進学率がとてもいいからという理由が大きかったです。それで、大学進学でどこの大学を選ぶかとなったときに、青森県立保健大学は就職率が本当に良くて、約 100%となっていて、やはり将来を考えたときに、就職率がいいところに行こうと思ったということもあって、大学に進学しました。

ただ、就職率だけではなくて、保健大に行きたいと思った理由も、もちろんあって、自分の家族が社会福祉士の方に助けられて、それで、「ああ、自分も、こういう職業があるんだったら、なってみたいな」というように夢を持ったのです。その夢に向かって勉強していくにつれて、いろいろな現場の方に相談に乗ってもらったり、学校の先生にもいろいろ相談に乗ってもらって、夢に向かって進んでいました。けれども、いざ4年生になって、「これから就職どうしよう」「これからの将来、どうしよう」と考えたときに、経済的な安定が、とても自分の中で大きくなってきて、それで、公務員を目指すことにしました。

自分の夢を追うか、公務員で安定を取るか、非常に、迷ったのですけれども、結局は、「レールから外れたくない、失敗できない」という考え方で、私は、公務員を選択しました。

(堺) 今、「レールから外れることの怖さ」のようなものが、日本の若者から話が出ました。スウェーデンのお二人に、日本の若者の言う「レール」が伝わるか分からないと思うのですけれども……。

先ほど、ベンヤミンが自己紹介で、「この間、高校を卒業して、今、働いている」というお話でした。そこで、ベンヤミン、この就職の話、どのような生き方で、今のような生活をしているのかということ、少し聞かせていただいてもいいですか。

ベンヤミン 高校を卒業してすぐに、自分は何を勉強したいかが少し分からなかったのです。ですから、すぐに進学して勉強する代わりに、1年間、仕事をすることにしました。そうすると、働く経験もできるし、自分は何を勉強したいかという、考える時間もできるから、いいと思っています。ですから、現在、仕事をしながら、どのような大学に進学したいか考えているところです。

スウェーデンでは、私のように大学進学前に働くことは珍しいことではなくて、逆に、その方が多いというか、普通のことです。ですから、高卒後すぐに進学をしないことになるわけですけれども、この選択によって、後のち、私の人生での成功に影響してくるというようなことは、全く心配していません。

(堺) ちなみに、将来どのようなことをやりたいか、今描いている夢があったら教えてください。

(ベンヤミン) 何かクリエイティブな仕事をしたい。一番希望していることは、グラフィックデザイナーの仕事です。

(堺) ダヴィドは、どうですか。

ダヴィド あと1年半ぐらいで高校を卒業するのですが、そこで、ベンヤミンと同じように、1年間か2年間、少し仕事をして、その後、大学で勉強しようと思っています。

(堺) そうなんですね。

先ほど、日本の若者から聞いていた「ルールの上から外れないように」ということと比べると、随分と自由な生活ができるようなイメージですけども、日本の方々の方から、何か、スウェーデンの様子を聞いて、何か聞いてみたいことはありますか。

A 僕、スウェーデンの方のお話を聞いて少し気になったことは、そのようなルールから外れるようなこと・・・といいますか、そうですね、転職が一つの例なんですけれども、転職を転々と重ねていくということは、日本だとマイナスイメージしかなくて、どんどん自分のやりたいことから遠ざかってしまうというイメージがあるんですけども、スウェーデンでは、転職は、どのようなイメージですか、何か影響があったりするのですか。

(堺) なるほど。スウェーデンで、そのように幾つも職を変えることは、不利益にはならないのでしょうかね。

(ベンヤミン) スウェーデンの受け止められ方は、その逆だと思います。「違った分野で仕事をしてきた」という経験は、ポジティブなメリットとして見られます。視野が広がりますし、いろいろな職場での経験ができるからです。どのような仕事をして、そこで得た経験や知識は、別の仕事に持って行って、別の分野で、また活用できると考えられています。

#### 4. 失敗＝自己責任、自分の能力不足・・・

(久野) 学ぶことについての保障だったり、あとは、今の就職や進学タイミング、転職についての捉え方一つを取っても、日本とスウェーデンは真逆だなということを感じました。

では、先ほど日本の皆さんから話していただいた生きづらさや様々な困難の原因とは何なのか、ということを少し掘り下げて考えてみたいと思います。どうしてこんなに生きづらいのか、ルールから外れるのが怖いのか、思い当たることはありますか。

K 私自身としては、「失敗が許されない」ということが原因だと考えます。失敗が許されないからこそ、私のことであれば、進学校へ行って、就職率のいい公立大学へ行って、そして、安定のある公務員を目指すという形。皆、失敗が許されないからこそ、手堅い選択しかできないという部分があるのかなと思います。

A 僕もKさんと、とても近い意見を持っています。やはり、1度決めてしまったら、「もう2度めは、ないよ。別の選択は、できないよ」ということが、とても不安だったり、少しもやもやしていると思っ

ていて。何か、高校までは、ひたすら親の勧めや、先生の言っていたことを忠実にこなしていればよかったけれども、例えば、大学受験になったときに、初めて1人で、どこに行けばいいのか、そのようなことを悩んで。それで、初めての選択なのに、それが、もう今後の生活にかなり影響を及ぼすということが、とてももやもやします。

例えば、僕は、情報学部情報学専攻でプログラミングなどを勉強しているのですが、初めは、何となくプログラミングをやってみたくて、今の大学の学部を選んだというように、まあ、何となくで選んでしまったのです。けれども、実際に入ってみたら、なかなか自分には合わないなと感じて、学部を変えたいなと思っていた時期も少しありました。ただ、それをいろいろな人に言ったら、「なかなか、そうやって学部を変えたりしたら、将来、就職するときなどに響いちゃうから、やめたほうがいいよ」「自分に合わないと思っても、ひたすら続けていくのが大事なことだ」などと言われて、本当に1回の選択で失敗してしまったら、なかなか他のものに変えるということが難しいということが、本当に自分の中で、もやもやしています。

#### 5. 「何者でもない状態」への不安

E 私も、大学受験で、選択、しかも、失敗できない選択を、いきなり迫られることに大きな疑問を感じます。私たちの過ごす小中学校時代というのは、友達同士で言われることも多分そうだし、先生からの指導もなのですけれども、何だか、すごく、周りと同じであることを、ずっと小さい頃から求められてきたような気がして。自分の選択ではなくて、ずっと、皆と同じであることを求められてきたのに、高3になって、「はい、選んでください」のようなものが、何か、こう、いきなり来るようなイメージが、とてもあって。同じであることを求められるのも辛かったし、それなのに、高3で突然、「選べ」「はい、自己責任だよ」ということが、何か、「えっ」という感じがして。

それでも、その中で一生懸命考えて選ぶしかないのですけれども、私自身も、とても悩みました。高2までは専門学校に行こうとしていたのですが、高3に進級した春に、やっぱり大学に行こう、受験しようと思っ

て受験勉強を始めたのです。悩んだ末に選んで、「選んだ以上は、この1年間は遊ばないで勉強する」と決めて、「これが終わったら、後で自由が待っているはずだ」というようなことを、自分に何度も言い聞かせながら、1年間必死に勉強しました。

それで、高3の2月ぐらいに大学受験が終わって、3月に結果が出るまでの間、高校を卒業しなければいけないことは分かっているのに、その次どこに行くか決まっていないう、何だか浮遊状態のような感じが非常に不安でした。1年間必死に頑張ったのに、ほんの1か月後、自分がどこにいるか全然分からない、大学生になれるか分からないし、頑



張ってきたけれども、「自分が何者なのか分からない」という浮遊状態のような期間の不安から、何か、あんなに頑張る必要はあったのかなとも思えて、もやもやしたことがずっと記憶に残っています。

(久野) 日本の皆さんからいろんなお話を聞いていて、私は司会ですが強く共感しています。弁護士の皆さんは分かると思うのですがけれども、司法制度改革で変わって、ロースクールに行かなければ司法試験を受けられないようになりました、でも、その司法試験に受からなかったら、高いお金を払ってやってきたことがどうなるか分からない、「自分は何者なのか」という不安は、とても感じていたのです。

ですから、今日、コーディネーターなのですからけれども、私も、若者の皆さん側にいたいぐらいの気持ちだな、というように思っていました。

(堺) 「受験、という早い段階で選択を迫られる」、「一生が決まる」という選択を若くして迫られることの大変さという話が出ました、スウェーデンでは、そもそも「受験」という概念は、あるのですかね。大学行くときに、受験勉強をするということはあるのでしょうか。

(ベンヤミン) いや、そのような「受験をして進学する」というのは一部の限られた人のためにはありますが、一般的ではありません。一般には、高校のときの成績によって数値が計算されて、その高校の成績で大学に入学できます。

高校の成績は、高校で勉強している中で得た知識を、幾つかの、いろいろな時点での試験で測ります。それで成績がつくのです。ですので、受験のように、1回だけのことで測るのではなくて、高校で勉強しながら、だめだったら、やり直す機会があるという、そのような試験のやり方です。

(堺) そうすると、ベンヤミンは、先ほど、「これから大学に行って勉強したい」という話をされていて、日本人の感覚では、「これから大学受験……」と大変そうだと感じられると思うのですが、ベンヤミンは、大学進学のために、これからたくさん勉強しないとイケないということは、ないのですか。

ベンヤミン はい、今から、追加で勉強することもないし、日本は「塾」というようなものがあるようではありますが、そのような塾にも、追加の学校にも行く必要はないです。

## 6. スウェーデンの若者が大事にしていること

(堺) だんだん別世界の話になってきましたね……。

先ほども言ったように、日本の若者世代の人たちは、どのような大学に行くか、大学に入ってから、どのようなところに就職するか、それが、大変大きな課題で、もう、それに向かって、毎日勉強したり、就職活動をしたりというような苦しい生活になってしまっています。

けれども、今のスウェーデンの話を知ると、同じ時期のスウェーデンの若者は、そのよ

うな苦勞には、あまり煩わされずに生きているように思えます。そこで、もう1回、スウェーデンのお二人に聞きたいと思います。日本の高校生や大学生が受験や就職活動に必死になっている時期に、スウェーデンの若者たちは、どのようなことを大事に思っているのでしょうか。

(ベンヤミン) まあ、そのような受験勉強の代わりに何をするかということは、もちろん個人個人、いろいろ違ったことをするのですけれども。それぞれの趣味など。

一部の人は、社会に関わるような、人格形成に取り組めます。一部の人は、自分の能力を伸ばすための、例えば、文化の活動に取り組む、あるいは、音楽に励むなど。

でも、私たちの多くは、友達と、いろいろ交流したり、遊んだりして、それを通じて成長します。知的にも、人格的にも、友達と一緒に成長していきます。

(堺) 若者の時期は、何と言うのですか、「一人間として成長していくための大事な時間だ」というような感じなのですかね。

(ベンヤミン) やはり、自分もそうだし、多くの友達もそうだと思いますが、ティーンエイジャーの後半の時期は、自分が人として形づくられていく時期です。ですから、もう、いろいろなミッションや刺激があって、いろいろな新しい責任も担うことになるし、人生の中で新しい段階に入る時期ですね。

(堺) そうすると、今、日本の若者たちは、その大切な時期に、受験や就職活動などで、かなり多くの時間を取られています。その日本の若者たちに対して、スウェーデンのベンヤミンやダヴィドさんから見たときに、どのような感想を持ちますか。

(ベンヤミン) それを聞いて、私たちは残念に思います。まあ、それでも、皆、いい人間に育っていくと思いますけれども、本人たちにとってもう少し居心地良く、受験勉強の苦しみなく、もう少しシンプルに、人生の次の段階にたどり着くことができたらいいのと思います。

## 7. 受験戦争と友人関係、競争社会

(堺) ありがとうございます。

今、「スウェーデンでは、友達などとの交流などを通じて、人格成長していく時期だ」というようにお話をいただきました。日本の皆さんは、今、ベンヤミンから励ましをもらいましたけれども、友達との関係について、今のスウェーデンの話聞いて、どうでしょうか。友達関係と受験の関係についても、何か、受験時代のエピソードがあれば聞かせていただきたいです。

D 僕は、受験はとてもしんどくて……。数少ない席に向かって、同学年の五十何万人ぐらいが争奪戦をするようなイメージです。その少ない席をめぐる、自分は少しでも前に行きたいし、他を蹴落としてでも、自分は、いい成績を取らなければと思っていたから、とても必死でした。

友達を何か陥れようなど、そこまではしなかったですけれども。周りの友達とは仲良く、

「一緒に頑張ろう」と励まし合っていてやっていたのですが、ずっと、全然見えない大勢の敵と戦っているようなイメージでした。

L 私は少し違って、友達との関係、周りとの関係は、あまり持たないように、何か、シャットアウトして、もう勉強だけしていました。平日は、学校の勉強プラス6時間、休日は7時間から8時間ぐらい勉強していました。

#### 8. いろいろな“成功”の形がある

(堺) 今の日本の学生のお話しから、必死に競争をしないといけない社会だということが見えてきました。ここでもう1回、スウェーデンのお二人に聞きたいのですが、スウェーデンでも競争することは、あるのですかね。受験戦争のような勉強の競争はありますか。

(ベンヤミン) 日本のような競争ではないのですけれども、もちろん、各大学での席の数は限られています。でも、それを巡って競争するというような印象は、ありません。それぞれのやりたいことが結構、それぞれ違っていたりするので、それぞれが個々の目標を達成できるように努力するのだと思います。

スウェーデンでは、成功するということは、単に学歴だけでは判断されません。例えば、社会で活動すること、あるいは強いビジョン、希望を持って、そのために頑張るといふ、それも一種の成功と言えます。

(堺) そうすると、先ほどの日本の話と比較すると、描かれるルールが一つではない、いろいろな成功の道があるということでしょうか。

(ダヴィド) その通りです。高校を卒業してすぐに働くことで、その道で続けていって成功することもできるし、あるいは、大学で勉強して、それで成功することもできるし。1回勉強して、仕事を始めて、そこで気が変わったら、また勉強して仕事を変えることもできるし。

また、私たちのように、市民団体を運営する形で、その活動が評価されて、そこから社会の中に進むこともできます。

#### 9. 「自己責任」の解釈と試行錯誤する権利

(久野) 私からもスウェーデンのお二人に少し聞きたいです。いろいろな成功があるということですが、勉強するかどうか、であったり、勉強の内容を決めるのも自分の責任ということですか。

(ベンヤミン) 義務教育は9年生で終わるので、中学3年生が終わったら、高校で勉強するかどうかは、もう任意です。ほとんどの人が高校に行き、少し働いてから、多くの人は大学に行くのですけれども、これは全く1人1人によって様々ということですか。

(久野) その勉強するプログラムと申しますか、勉強していくスケジュール管理なども、自分たちでやるということですか。

(ベンヤミン) そうですね。自分で考えて、自分で判断して、自分の人生の中で、どの

時点で勉強するのがいいのか、就職するのがいいのか、自分で判断します。

(堺) まあ、ある意味、非常に自己責任で頑張っている、という感じですよ。

(久野) 本来の意味の「自己責任」ですね。第1部の本田先生のご講演で出てきたような、日本で唱えられている「自己責任」というものとは違うのかな、と思うのですけれども。日本で言う「自己責任」は、ここに来てもらっている日本の皆さんからすると、「自己責任」と言われるとき、どのような感覚になりますか。

D 「自己責任」と言うと、何か、「自分のせい」と言われているような感じ。今の自分の置かれている状況は、今までの自分が良くないせい、とか、自分が至らないから、といった感覚です。

F 自分自身が引きこもっていたときに思っていたことは、「そうなのは、すべて自分の責任だ」というように感じていました。また、それは、親からも、社会からも、そう思われているというように、自分自身で、そう思い込んでいたということがありました。

「自分は、すごく無価値だ」と。それこそ、本当に人として最低の、もう、人としての人格も全部否定されているような感覚でいて、そこから立ち直るためには、自分と同じような思いを抱いている若者との出会いといいますか、そのようなものがなくて。そのような彼らと一緒に学び合うことをするということが、とても大事だと思うのです。

それで、若者会リストで、そのような仲間たちと一緒に、本田先生の本を見ながら学び合いをしてきた中で、「戦後日本型循環モデル」という社会構造を知りました。そのときに、自分たちが抱えていた自己責任感、責任論というものに侵されていた感覚のようなものが、すべて自分たちに責任があったわけではなくて、社会構造の中で生まれてきたものであるということ、自分たちは社会構造から影響を受けていたのだ、ということに気づくことができて。そのとき、非常に、自分の中で心が軽くなったような感じがしたのです。

それと同時に、そのような試行錯誤ができる時間や環境のようなものだったり、その期間中の生活を支える保障もない、ということにも気づいて。また、試行錯誤をする若者を支えるのは、今の日本だと、家族、家庭の支えというものも必要だと思うのですけれども、そのようなものも、家庭の経済力に非常に左右される現状があるということが一つの問題だな、というように強く感じました。

#### 10. 受け取ったから、税金で貢献は当たり前の社会

(久野) 引きこもることさえ家庭の経済力に左右される、そこから立ち直っていかうとすることが個人の資力などに左右されてしまう、ということですかね。だから、そのような「自己責任」ではなくて、試行錯誤する機会や環境を社会でカバーできるようになっていったらいいなということ、皆さん、日本とスウェーデンの皆さんから話を聞いて思いました。けれども、そういうことを制度としてやろうとすると、すぐ、「お金がない」など、財源の問題、「財源不足だ」と言われますよね。

(堺) そうですよ。社会保障を充実させようとする、必ず、「お金がない」という話

が出てくるのが日本ですね。

他方で、スウェーデンは、社会保障が充実しているけれども、「税金も高い」と、よく言われます。「税金は高い、負担が重い」というような感覚は、あるのですか。

(ダヴィド) スウェーデンは税金がとても高いというようには思っていない。社会から得るものも考えることが必要だと思います。社会から得るものもたくさんあって、そのようなものを実現するためには、やはり、どこかからお金が来ないといけないので、社会から受け取ったものを、今度は自分たちが税金という形で貢献するということは、もう当たり前だと思っています。

(堺) では、逆に、「税金を下げしてほしい、もっと低くしてほしい」というような意見についてどう思いますか。今の話だと、「社会からいろいろなものが与えられるから、税金は負担ではない」と。日本では、「税金は、できるだけ低くしてほしい」というように、皆、思うのですけれども、スウェーデンの場合は、税金が下がることは、あまり……、それは、社会からのリターンが減ってしまうというような感覚なのですかね。

(ダヴィド) その通りだと思いますね。といいますのは、スウェーデンの福祉、公共の部分は全部、税金で成り立っているから、税金が減れば、そこも小さくなるということに繋がります。

(久野) 今のスウェーデンでの考え方を聞いて、スウェーデンに実際に視察に行つて勉強してきた立場から、どんなことを感じましたか。

E スウェーデンのことを勉強しながら日本と比較しているときに、感覚としてなのか、「権利と義務の考え方が、日本と真逆だ」と、よく言われて。スウェーデンでは、大人になっているいろいろな義務がのしかかる前に、勉強する機会や、自分の好きなことをする機会などがたくさん与えられて、自立するために国が全力でサポートしてくれるというような感覚や実感があるから、大人になったときに、それを、国に税金という形で還元しようということが当たり前に見えるのです。

けれども、日本だと、そのような実感が小さい頃からあまりないまま、大人になると途端に義務がのしかかってくるというような感覚。例えば、「夏休みの宿題をやらない人には、夏休みはないよ」などと、よく言われるかと思うのですけれども、日本だと、「義務があるから権利が保障される。義務を果したら権利が保障されるんだよ」というような考え方だけれども、スウェーデンだと、「権利は、元々、最初に与えられるようになっていて、自立するまでサポートする。では、義務は、後で還元するね」というような、国と国民の信頼関係のようなものが日本と全然違うかなと。義務と権利の考え方の違いを強く感じています。

(久野) とても鋭いご指摘ですね。

## 1 1. 社会への信頼感が育まれる理由

(堺) 今の「社会に対する信頼感」のようなものが、やはり、大きな違いかと思うのですけれども、なぜ、この違いは生じるのか。

スウェーデンの方に、もう1回聞いてみたいのですけれども、先ほどの税金に対するコメントのような、「自分たちが出した税金が、きちんと社会から返ってくる」と思える、社会に対しての信頼、そのよう気持ちは、学校で習うことなのですか。なぜ、そのように皆が思えるのでしょうか。

(ダヴィド) それは、学校の中もそうですし、社会の他のところでも、そのようなことに気づきます。例えば、病気になったり、けがをしたりすると、病院では高いお金を払う必要はありません。そうすると、なぜ、これほどまで安いのか、周りの家族などに聞くようになる。そうした普段の会話からも、「あ、これは税金から来たのか」と気づきます。そこから信頼が生まれるのです。

(ベンヤミン) あと、学校でも、早い段階から、周りからたくさんのサポートがあるということに気づきます。学校の中でも、別の生活場面でも、何か問題にぶつかったり、悩んだりしたら、どこか相談できる場所が必ずあるというように、周りから自然に伝わってきます。

(堺) 今、スウェーデンのウプサラで活動している「若者の家」という団体の活動も、そのような社会の中での支え合いという活動の一環、同じような、その延長線上にあるような活動なのですかね。

(ベンヤミン) そうですね。その通りです。「若者の家」に滞在している時間や活動している時間、あと、市が運営しているユースセンターや余暇センターも同じですけれども。

何かしら、「起こってほしい、あってほしい」というように思ったら、やはり、自分からイニシアチブを取る必要があることに気づきますが、どのようなことであれ、それをやろうとしたときに、友達がサポートしてくれるということは確信しているし、逆にその友達が何かやろうとしているときは、私も彼をサポートする。そのように、手伝い合う、サポートし合うことに自然となっています。

## 12. 日本における支え合い、若者の社会参加の萌芽

(久野) 若者の家の活動なども通じて、やりたいことがあるときには互いに支え合う、そういう経験をきっかけとして、社会に貢献する、支え合うという感覚が育まれていくのですね。

日本でも、地域社会の中で、社会貢献活動をしていると先ほど自己紹介してもらった浜松若者社中の皆さんから見て、このスウェーデンの「若者の家」というものを、どのように感じていますか。

A 今日の話の中で、初めてスウェーデンの方と共通点を見付けられたような気がして、少しうれしいです。

僕たちがしている活動も、本当にスウェーデンでやっている「若者の家」と、とても似

ていて。といいますのも、社会のニーズと自分たちのやりたいことが、うまくマッチして、それをプロジェクトにしていこうということが、われわれの団体の理念で、目的であります。

先ほども少し紹介しましたがけれども、「浜松アトランチ」というプロジェクトを一つ、簡単に説明したいと思います。このプロジェクトの発端は、静岡県浜松市には、おしゃれなお店や個人経営の飲食店などがいろいろとあるにもかかわらず、なかなか若者に来てもらう機会がない、あるいは、訪れる機会がないというお店側の悩みや、ちょっとした疑問点を基に発足したプロジェクトです。

例えば、僕も、ちょっとご飯を食べに行くとなったときに、少しおしゃれなイタリアンなどに1人で行くということは、なかなかできないので、やはり、いつもラーメン屋などになってしまうのです。けれども、やはり、それは少しもったいないなと思っていて。

それで、具体的にやった方法としては、一つのランチマップで、いろいろな個人経営のお店やおしゃれなお店などを紹介して、若者は、マップに載っているお店を訪れて、写真を撮ってSNSで投稿するとクーポンやデザートがもらえるという特典が若者にあるようなランチ本を作成して、販売しました。

僕が言いたいことは、私たちのプロジェクトの紹介ということではなくて、若者でも、社会についていろいろ関心があるし、「少し、こんなこと疑問点あるな」と思っている人は少なくないということです。でも、いろいろなことを言いたい若者がいるにもかかわらず、社会の中で、そのような意見を口にする場所がなかなかない、ということが本当に多いと思っていて。このような気持ちは僕以外の若者も結構思っていると思うので、そのような若者たちの声を届けるためのプラットフォームなどができたら、もっと良くなるのではないかなと思いました。

(久野) 日本の他の方はいかがですか。

K 浜松若者社中の方々であったり、スウェーデンの「若者の家」は、やはり、社会に参加しているなということを、すごいと思ってしまって。これは、やはり自分としては、「社会に参加している」という感覚がない、薄いということも、あると思うのですね。政治も、「別世界のことだ」というように、正直、考えているところもあって。

今、「社会を、どうにかして変えよう」というよりは、「その与えられた枠組みの中で、自分が何とかして生きるために頑張ろう」というように、生きることで精一杯というところもあるのかな、というように感じています。

ただ、私自身としても、社会に対して何かするというところに、意味がないというように思っているわけではなくて、投票などにもきちんと行っていますし、そのようなことをするのですけれども、「どうせ変わらないかな」というように思ってしまう部分もある。「そこに時間を費やすのだったら、自分が何とか生きるために頑張ろう」というように、社会のことに時間を費やせない状況に、今、自分がいるのだなということに気づきました。



### 13. 若いというだけで価値がある

(久野) 「どうせ変わらない」という思いから、自分が生きるのに精一杯になってしまっていることに気付いたと。

若者エンパワメント委員会のお2人は、スウェーデンに行って視察をしてきて、今日また、ここでいろいろな意見交換をしましたが、そろそろ時間が迫っているということもあるので、言い残したことなどがないように、ぜひ一言ずつ、お願いします。

E スウェーデンに行ったときに感じたことは、向こうでは、若者は、「若者」という、もうそれだけで価値があって、「何か力があるから、任せたら何かできる、若者たちには力がある」と、皆がそれを信じて、例えば、「若者の家」のようなユースセンターという場所があったり、機会が与えられていたりしたので。

例えば、政治や社会問題など、「社会のために何か」というようなものだと、少し距離があるかなと思うのですけれども、私は、「社会のために」などではなくて、最初の入り口は自分の好きなことなどでいいと思っています。といいますか、自分が好きなことや、やりたいことを、自分がありのまま社会に出ても、活躍できる場所がもっとあるよ、ということに気づけるような社会だったらいいなと、とても、スウェーデンに行って、思いました。

D 僕は、今、Eさんが言ってくれた、「スウェーデンでは、若いという、それだけで、そもそも価値があるんだよ」ということを知ってとても救われました。自分は、あまり価値などない人間と思っていた時期があったので、その発想、考え方が、とても、見習いたいし、広げたいです。

あと、スウェーデンに行った後に、僕は、いろいろな友達に、スウェーデンで見たことなどを、たくさん話してみたのですよ。「遊ぶ場所が欲しいと発信したら、願いがかなって、公園にダンス場ができた」など、見聞きしたいろいろな話をたくさんしたら、友達が「スウェーデンって、何だか、『社会が生きてる』って感じがするね。日本って社会が死んでるみたいな感じがするね」と言われて・・・。

このサミットの事前打合せの中で、スウェーデンの方が、「スウェーデンの若者は、政治に対して『近いもの』というように思っている人はそこまでいないかもしれないけれども、自分が社会を良くできるとは思っているよ」と言っていたんですよ。それを聞いて、「社会が活着ている」って、そういうことなんだなと自分の中でしっくりきました。日本は、あまり、自分が社会を良くできるとは思ってなくて、皆がそうだったら、自分のことで精一杯で、本当に「社会が死んでる」と、なってしまうなと思って。

ですの、僕たちができることは、最初の自己紹介の通り、自分が好きなことを通じて、いろいろな人と関わって、いろいろな人を巻き込むことで、少しでも何か動かせるというような、自分の中にあるものから引っ張っていくこと、そのようなことを少しずつやっていけば、それは、自分でも少し何かできる、自分でも少し社会を良くできるかな、と、参加者が思ってくれるかなと僕たちは思っているから、そのような活動を少しずつ続けていこうと、僕は思っています。

E 付け加えると、若い人、自分と同年代や、もっと年下の人たちには、「自分ももっとできる」と自分自身で思ってもらいたいし、あと、年上の人たち、大人の人たちなどからは、「若者でも任せたら結構できてしまうんだな」ということを私たちの活動を通しても分かってもらいたくて。もう少し子どもにオープンな場所で、もう少し若者に信じて任せてくれてもいいかなと。そのような場所が欲しいな、というように思います。

#### 14. 「生きた社会」になるために望むこと

(久野) このサミットに向けて皆さんと話し合う短い時間の中でも、皆さんのお話がどんどん深くなっていくことに感動しています。今も、打合せでは出ていなかった、「社会が死んでる、生きてる」という鋭い言葉などが出てくるので、若者の皆さんに「任せたい」と思いました。

それでは、日本側からの最後として、「このような社会になってほしい」という希望を、Fさんの方から少しお話しただければと思います。

F はい。若者が、どう社会につながっていくか、このような活動は、根本的な価値観を変えていくために必要なことだと感じています。ただ、それは、本当に一朝一夕でできるようなことではないと思っています。ただ、そのような活動とともに、一方、今この瞬間も、先ほど話題になったような自己責任論や、ルールから外れた絶望感に苦しんでいる若者がいるということを、まずは皆さんに知っていただけたらと思います。

そのような若者を支えるためには、やり直しができる、試行錯誤ができる、そのような仕組みや保障が必要なのだということを、私は感じています。具体的に、どのような仕掛けが必要なのかということは、自分自身が体験したところから言いますと、「自分が自分であっていい」という、そのようなものを、同じような仲間から求められながら、認められながら、実感できる、そのような自尊心の回復のための居場所が必要だということ。それに付随して、実際に働きながら、学びながら、「自分は、何ができて、何ができないのか」、そのような試行錯誤ができる場所と時間、そのようなものがいいと思っています。また、それらを行うためには、そのような若者を支えるための経済的な支援というものも必要だと感じています。

今、そのために、僕たちの団体が行っている活動の一つとして、僕たちが持っている「風のすみか」というパン屋さんがあるのですが、そこでは、中間的就労の場として、そのようなパン屋さんで実際に働きながら研修を行って、そこで、お互いに研修生同士の慣れ合える場というものも持っているのです。しかし、現状、そこで半年間研修を行うに当たって、そこで働く若者たち、研修を受ける若者たちに賃金を払うことができずにいて、最低限、交通費だけを団体から何とか出しているという現状です。「参加したい」と言っている若者はたくさんいるのですが、そのような経済的な現状では、なかなか参加できないという若者も多くいます。

若者がやり直すため、試行錯誤するため、そのようなものができるためには、生活の保障だったり、そのような、それを支える家族への保障、また、そのような若者を受け入れてくれるための、受け入れる社会、会社、職場への保障、また、そのような場を作ろうとしている者たちへの保障、そのようなもの、いろいろな保障が必要だと思っています。そのような、若者への保障がきちんとされるような世の中になっていってほしいな、と感じています。

#### 15. スウェーデンの若者からのエール

(堺) はい、時間もそろそろ迫ってまいりました。

今、日本の若者たち、スウェーデンの話聞きながら、いろいろなことに気づいたり、これから始めていこうと、いろいろなことを思えるようになってきたと思うのですけれども。

では、最後に、スウェーデンの方々から、これから、私たち、日本の若者、どうやって頑張っていきたいか、何かアドバイス、メッセージを、いただければと思います。

(ダヴィド) まず、日本の若者の皆がすべきことは、とにかく、今のいい活動が続けることです。といいますのは、今、引き起こされている変化は、ここにいる彼らが、その変化を起こし始めているので、それは可能だと、私は思っています。

今日は、「ルールが1本敷かれて、それしか成功の道がない」という話が、とても多かったです。でも、今日ここに集まった皆が、そのルールから離れて別のことをして、「他のことが可能だ」と示しているから、とても勇気ある行動です。

ベンヤミン スウェーデンでは、若者でも、社会の中で役割を果たす機会があります。その出発点は、自分たちが楽しい、興味深いと思うものから始まります。今ここにいる若者がやっていることは、自分たちの力や特色を生かして、良くないと思っているところを、より良くしようとしているのですね。努力している人たちです。ここで諦めずに、また続けていけば、もう、とてもうまくいくと、私は確信しています。皆、一緒にやっていけば、どこまででも行けるのではないかと思います。

(堺) ありがとうございます。

では、このスウェーデンからのメッセージを最後にして、日本の皆さんも、これを励みにして、これから頑張っていっていただければと思います。

(久野) 以上で、「若者未来サミット in 青森」を終了します。ありがとうございました。

(堺) ありがとうございました。